

国際ビジネスコミュニケーション学会関東支部会報

January 2024, JBCA KANTO CHAPTER BULLETIN, No. 121

支部長あいさつ

明けましておめでとうございます。

と、ばかりは言えないような新年の幕開けとなりました。

今回の被災地の会員の皆様に心よりお見舞いを申し上げるとともに、本学会及び関東支部会でできることがありましたら、何なりとご連絡いただきたく存じます。

(連絡先は以下に記しております。)

さて、このような時期ではあるのですが、1月の関東支部会は1月27日(土)に、東洋大学現代社会総合研究所との共催で、対面及びオンラインも継続するハイブリッドの形で実施致します。(今回も参加費はオンラインおよび対面ともに無料、そのかわり茶菓等の準備もごく簡単なものとさせていただきますと思います。)

今回は、まず支部総会を15分ほど行い、その後の第1部(2:15~3:15 予定)にて会員の蔵屋伸子先生に「日系から外資系になった企業での英語コミュニケーションツール利用を中心に ―」についてご発表いただきます。このご発表は、第2部のシンポジウムとも密接に関わっている内容です。

第2部(3:30~6:00 予定)のシンポジウムでは、「生成AIがどのようにビジネスシーンを変えつつあるのか、そしてどこまでのポテンシャルがあるのか」について考えます。

まずは、生成AIを利用したスマート農業について、東洋大学の濫澤先生からご講演をいただき、その後、複数のビジネスパーソンから、実際の企業での実情をシェアして頂きます。

今後の日本社会の変化について熱い議論を行うシンポジウムです。万障お繰り合わせの上、ご出席くださいませ。

出席ご予約の皆様には、以下のURLより可能な範囲内で研究会及び懇親会出席のお知らせをいただければ幸いです。

<https://docs.google.com/forms/d/1QQEbyo7hFHvXF8Iffb8MBEDuRWOBqRaLrLzKc4dgcwCU/edit?pli=1>

多くの方にご参加いただき、活発な議論ができることを心より楽しみにしております。

J B C A 関東支部長 藤尾美佐

<対面でのご参加の場合>

入口は8号館（パリの凱旋門みたい形をしたガラスばりの建物です）が一番便利です。8号館で名前とご所属をご記入いただき、すぐ左に曲がって頂いたら10号館が見えます。

<ZOOM 研究会ご参加の際の注意点>

上記 Google Form でお申し込みいただいた後、URL のお知らせが届きます。

ZOOM には、マイクをオフにしてお入りください。また、万が一のことを考えまして、当日録画させていただきますので、事前にご了承くださいませ。（そのため、ビデオのオン・オフも個々にご判断いただければ幸いです）。これは公開目的ではなく、滞りなく研究会が終わった際には、すぐに消去する予定です。ただし、学会のPRのため、2、3分の動画を編集する可能性もあります。その際には、必ずご本人に事前の同意を伺いますので、同意なく画像が残ることなどは一切ありません。

ZOOM の使用にご質問がある場合は、下記、佐藤洋一先生までお問い合わせください。

<ご紹介者があった場合>

会員の皆様からのご紹介がありましたら、お知り合いの方に体験参加いただくことも大歓迎です。是非、お声がけください。その際は、当日のスムーズな運用のため、以下の3名のメールアドレスに、事前に出席者のお名前をお知らせいただければ幸いです。念の為、ご本人からも上記の Google Form にて参加をお申し込みいただければ幸いです。

支部長 藤尾美佐	misa_f@toyo.jp
支部長補佐 野村誠二	seijinomura@nifty.com
支部長補佐 佐藤洋一	sato108@toyo.jp

多くの方のご参加、心よりお待ちしております。

2024年1月 第121回関東支部研究会報告:研究テーマと発表内容

日時：2024年1月27日（土）14:15～18:00（支部総会は13:45-14:00まで）

会員以外の受付は14:00～14:15

会場：東洋大学白山キャンパス 10号館 A101教室（オンラインも併用）

国際ビジネスコミュニケーション学会関東支部会（東洋大学現代社会総合研究所共催）

<支部総会> 13:45 - 14:00（関東支部会員のみ参加可）

- 昨年度の予算報告と今後の在り方について

<第1部> 会員発表（14:15—15:15）

発表者： 藏屋 伸子（東洋大学）

タイトル：「日系から外資系になった企業での英語コミュニケーションツール利用を中心に — 」

要旨： ビジネスにおいて必要なコミュニケーション能力や英語力を知るために、外資系企業のビジネスマンを調査する研究は複数存在する。そういった企業では、英語や英語を使った英語話者とのコミュニケーションが必要なことは入社前からわかっていることであり、それらの企業内での成功者の能力は、そういった職種の志望者にとって目標となると言えるだろう。しかし、業務にあまり英語は必要ないはずだった日系企業が、外資系企業に買収され、外資系企業としての歩みを始める例も昨今では皆無ではない。本研究では、日系から外資系になった企業での英語コミュニケーションについて調査した。その際、近年急増している機械翻訳や機械翻訳サービスへの依存度が高いと想定し、生成系 AI を含むツール利用を調査の中心とした。各協力者には、現在の業務上の英語コミュニケーションについてだけでなく、海外駐在経験、これまでの学習履歴や現在の学習方法、今後入社する人に期待する英語力やコミュニケーション力についても質問した。本発表では、まずその調査結果を報告し、最後に今後の大学英語教育の指針への示唆としてまとめる。

＜第2部＞ シンポジウム「生成 AI はどのようにビジネスシーンを変えることができるのか」

1) 招待講演 (15:30 –16:30)

発表者： 東洋大学経済学部 教授 澁澤健太郎

タイトル:「スマート農業の将来」—ドローンと AI—

要旨： 気候変動や経済・社会格差の拡大、世界的な政治情勢の不安定化など、人類は大きな課題に直面している。一方、昨年登場した生成 AI は、社会での受け入れ態勢が十分でないまま、急速に浸透してきている。高齢化、人口減少が急速に進展するわが国で生成 AI が果たす役割は、どのようなものであるのか。画期的な技術革新であるドローンと生成 AI を結びつけて農家の生産性を向上させることが可能である。農業という重要な産業に生成 AI が果たす役割について具体的事例をあげて検証したい。生成 AI について学習することは、新しいものや仕組みを考え出し、本来の人間力を飛躍的に向上させるチャンスでもある。

2) ビジネスパーソンによる現状報告—Machine Translation を中心に— (16:30-17:30)

発表者： 株式会社ゴール 花木康行様

発表者： IT 業界から1名予定

3) フロアとの質疑応答 (17:30-17:50)

- 終了後には懇親会を予定しております。よろしければ是非ご参加ください。

前回支部会について

2023年9月23日(土)に行われました、第120回関東支部会(対面及びオンライン)の発表テーマ及び概要を報告致します。

* 要旨や所属は発表時のもの。

2023年9月 第120回関東支部研究会報告:研究テーマと発表内容

日程： 2023年9月23日(土) 午後2時半開始 午後6時終了(予定)

会場： 東洋大学白山キャンパス 6号館2階 第3会議室 (オンラインも併用)

＜第1部＞ (発表者 敬称略)

午後 2:30 ～3:20 発表 1 (研究発表)

発表者： 東京センチュリー株式会社 上席参与 本田 健

題 目： なぜ東京センチュリー(株)は、超優良企業である NTT との関係をこれ程までに深化させる事が出来たのか — 「企業としての成長の軌跡」並びに「ビジネス・コミュニケーションの果たした役割」の両面からの考察 —

要 旨： 2009年に東京リースとセンチュリー・リーシング・システムが合併して誕生した東京センチュリー(株)は、当時の経常利益が 200 億円程の中堅企業であった。それから 11年後の 2020年に NTTグループの主要金融子会社である NTTファイナンス(株)のリース事業分野の経営を任せて頂くことになり、NTTと東京センチュリーを親会社とする NTTーTCリースを設立。また同時に NTTとの資本業務提携を行い、NTTは当社株式を 700 億円取得し株主比率 10%で第3位の大株主となりました。その後も両社の協業は深化しており、インドでのデータセンター事業運営等も行っております。

中堅企業であった東京センチュリーがどの様にして、日本を代表する企業である NTT との関係をこれ程までに深めることが出来たのか、その軌跡を振り返る事としたい。

ポイントの一つ目は、どの様にして東京センチュリーが NTT から見て魅力的な企業へと成長することが出来たのかその軌跡を探ると共に、二点目として両社間で役員ベースでのビジネス・コミュニケーションがどの様に行われ、それがどの様な効果を発揮したのか、事例を交えてご説明することといたしたい。ビジネスの現場でどの様な会話が行われているのか、ご理解頂ける場になればと考えております。

午後 3:30 ～4:30 発表 2 (研究発表)

発表者： 関西学院大学商学研究科 特任教授 久島幸雄

題 目： 欺罔のコミュニケーション — 企業不祥事とビジネスコミュニケーション —

要 旨： 企業活動のグローバル化に伴い、国内外でのトラブルの増加が顕著である。それらの一端は東証の適時開示または新聞報道によって窺い知ることができるものの、すべてが網羅されているわけではない。そこには、第三者が乗り越えることができない機密保持の壁が立ちはだかっている。企業にとって、これらトラブルは恥そのものであり、外部に知られたくない事実、隠したい事実である。中でも、企業不祥事については、社内でも一部の関係者しか知りえない極秘事項となっている。

それゆえに、これらの企業不祥事の詳細と反省事項が社内で共有されることはない。当然のこととして、他の企業がそれら企業不祥事の発生を知ることもない。たとえ海外の企業不祥事によって我が国の富が失われていたとしても、その教訓を活かして我が国企業における同種の損害発生を未然に防ぐことができないのである。

一方、企業不祥事のツールとなる欺罔のコミュニケーションについては、国内外での研究が認められるものの、事例の説明が乏しく企業経営への応用の面で難がある。また、

ビジネス詐欺をはじめとする企業不祥事の未然防止策を提示するものではない。これには、前述の「外部に知られたくない」という企業側の論理も背景にあらうが、何よりも「企業不祥事の全体像を知る専門家がない」ことが原因であると考えられる。

報告者は個人的に知りえた数多くの企業不祥事に精通しており、また自らがその解決に当たってきた。本報告では、報告者のリスク管理、法務、企業経営に関する知識と経験を踏まえ、欺罔のコミュニケーションという観点から企業不祥事の事例を解説したうえで類型別に整理・分析し、それらの特徴と未然防止策を提示する。

<第2部> (発表者 敬称略)

午後 4:50 ~6:00 ゲスト・スピーカー

発表者： 片山晶子 東京大学/早稲田大学早稲田大学大学院 非常勤講師

題 目： ESP の質的研究 ―背景・方法・活用

要 旨： 言語習得・言語使用は複雑系の社会事象である。故に、その研究方法は、「何を知りたいか」「結果をどのように実践に生かしたいか」により、多種多様になってきている。特にビジネス英語も含めた English for Specific Purposes (ESP) では、「いつどこで誰がなんの目的でどのように言葉を学び、使っているのか」という状況依存性を、十分に描写・分析することが研究において不可欠である。

一般的な第二言語習得 (SLA) の研究においても、かつては認知科学や心理学の方法に準拠した量的手法が中心だったが、近年では「社会派」に転じた (Block, 2003) と言われている。最近では、言語習得の当事者の内面や、習得が起こる (あるいは起こらない) 直接・間接の状況・環境・来歴・政治的力関係等に目を向けた、学際的研究への支持が定着し、同時に、一般化が目的である量的研究とは目的・方法・思想が異なるエスノグラフィー・談話分析等の質的研究が盛んに行われるようになってきている。

この講演では主としてビジネス英語の教育と研究に携わる方々を対象に、ESP の質的研究について実際の研究を例に具体的に論じる。また近年注目されている量的・質的両方のアプローチを用いた、混合手法の研究にも言及する。

*会員による新刊情報があれば是非お知らせください。

編集・発行 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20
東洋大学 経営学部 藤尾美佐 研究室内
国際ビジネスコミュニケーション学会関東支部長 藤尾美佐
TEL 03-3945-7295 (直通) FAX 03-3945-7477 (教務課)
電子メール：misa.fujio@gmail.com / misa_f@toyo.jp